



# なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



## 「関心・意欲・態度」の学力について

今回は、「かんしん いよく たいど」の学力内容についての説明をしておきます。少し、むつかしいですが、よく読んでください。

たとえば、花屋さんの店先に並べられている花で考えてみると、同じ花が教科によって異なる課題対象になることが分かります。

理科的には、花の品種や、花弁、葉・茎・根の構造、裸子植物か被子植物なのか、生育に適切な環境はどのような所か、花の成長などが課題対象となるでしょう。

あるいは、美術的には色彩や形が描く対象であり、その陰影が描画対象になることもあります。そして、国語的には「きれい。美しい。かわいい」などと言語(言葉)で人の感情を表現する対象となることもあるでしょう。

それに対して社会科では、全く異なる視点から「花」をとらえます。たとえば、地理的分野や公民的分野の視点では、なぜ花が売れるのか。原価と販売価格・利潤はどうなるのか? 花の価格が高いのはいつか、安いのはいつか、それはなぜか? 花屋の店舗はどのような立地条件の場所がよく売れるのか? 1年中花を売るにはどんな工夫がいるのか? 花はどこから仕入れるのか、運送手段は何か? 歴史的分野では、花屋という商売がいつ頃から成り立つようになったのか。花屋が成立するための歴史的条件は何だったのか? などです。

その意味で、「関心」は、「花屋の花」をより具体的に社会科学的な研究対象としてとらえ、たとえば「花という商品の価格の決定要因」を考えたり、「花屋という商売の歴史」を調査したりする意識の傾向だと、私は理解しています(ノートに調べたことを整理することなどは、「意欲」と「関心」の現れの一部だと考えています)。

さらに「態度」は、いわゆる「授業態度」ではありません。学力としての「態度」は、もっとも高度な学力態様です。社会事象(社会でおこる様々な現象)の多くは、たいていの場合、何らかの意志決定あるいは価値判断を要求します。その意志決定や価値判断が、客観的・合理的で、かつ公正な過程を経て導き出すことができるかどうかが、社会科学的には重要な学力内容になります。

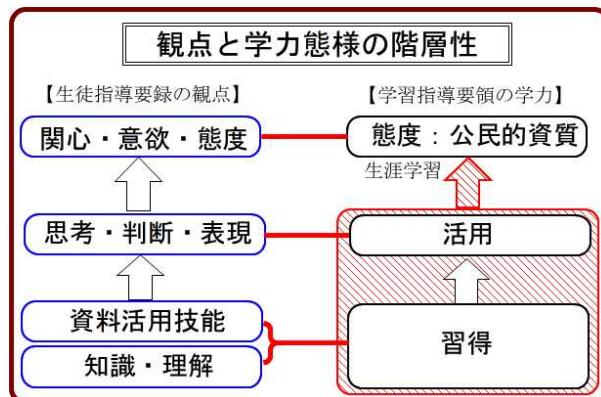
少し詳しく言うと、前提となる事実と結論に至る間の、学習者の考えた筋道の説明

が重要なポイントとなります。たとえば、「花屋」の場合だと、「花屋」を「歴史的事実」としてとらえ、将来でも「花屋」という商売が成り立つかどうか、あるいは発展するのかどうかを思考し、判断しなければならないような「課題」に、自分の「結論」を出さなければなりません。そのような「事実」と、「結論」の間において、<sup>ほうりやく</sup>思考される方略(方法)が、社会科の評価における(社会科学的)「態度」であると、私は考えています。この「関心・意欲・態度」が育ってこそ、将来、自分の責任やアイデアで生きていく場面で役立つ「社会科の学力」となるでしょう。

以上に説明した「社会事象に対する関心・意欲・態度」のとらえ方は、文部科学省が定めている「学習指導要領」(小中学生に指導しなければならない内容を定めた文部科学省の省令)と「生徒指導要録」(文部科学省が定めている学習の記録簿)の観点別評価のとらえ方とほぼ同じであると強調しておきます。

「学習指導要領」と「生徒指導要録」に記録される「観点別評価」は、右図のような関係になっていて、すべての小中学生に義務教育で身につけることを期待されているのが習得と活用の部分です。

ただ、これらの観点の評価をどのような方法や場面ですべきなのかについては、法律や文部科学省は定めていません。つまり、評価方法と場面については、実際に学校で生徒を指導している学校の先生の工夫に任されています。



参照：学校教育法第30条第2項

じつさい

## 「関心・意欲・態度」を作文で評価する

さて、「社会事象に対する関心・意欲・態度」は、結論を簡単に決められないような問題場面に関する「作文」で、具体的に現れます。ですから、「社会事象に対する関心・意欲・態度」の学力は、「作文」に現れる社会科的な「表現力」によって測定可能になります(学力を測ることができるということ)。

もし仮に、裁判員裁判であなたが判決に参加するとなったら、裁判員のあなたはどんな方法で結論を出しますか? そのような場面では、より公平な解決方法を見いだすには、身勝手な理屈ではなく、客観的かつ公正な過程を経て導き出すことが求められます。社会科学的な「関心・意欲・態度」の場面です。作文を評価する際には、社会科学的な「関心・意欲・態度」が表現されているかどうかを客観的に審査します。